雙正傳

二

へ13
2898
9

長門文書
四全公
屋定
昭和九年七月廿四日購求

近世雲晴間雙玉傳第二輯巻之四

新話

播場　宮田南北編次

第十七回　獄舎を隔て両賊述懐を演

登嘗宇雑ハ打おかをくる。頭をかゝ撞げて。獄舎の外ふ焼幸し。火陰ふとゝとろ〳〵見ゑる。這人年齢三十有八九色白ゑて髯青く。眼中尖く星ふ似て。肩根ふ少〳〵ゑが有。額月の跡黒くのびて。百日鬚と着ゑるがごゝ。一癖者ゑゝ見へくゑゝゑ。その時〳〵も那罪人へ。宇雑ふ向つゝ申やう。其じが今生の命も。今宵ふ逼りゑれが只一個欝々と。獄舎の内ふ

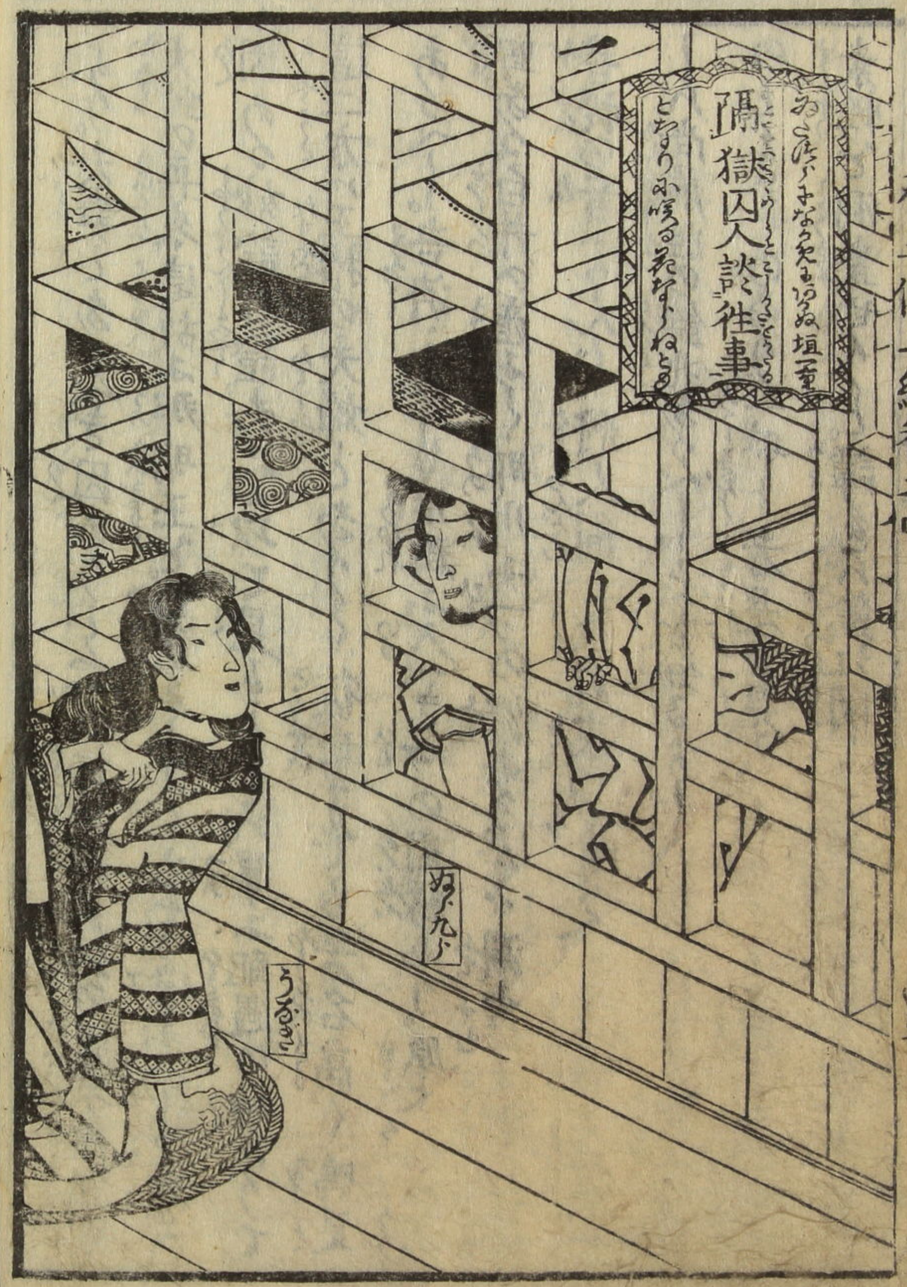
へ 13
2898
巻 9

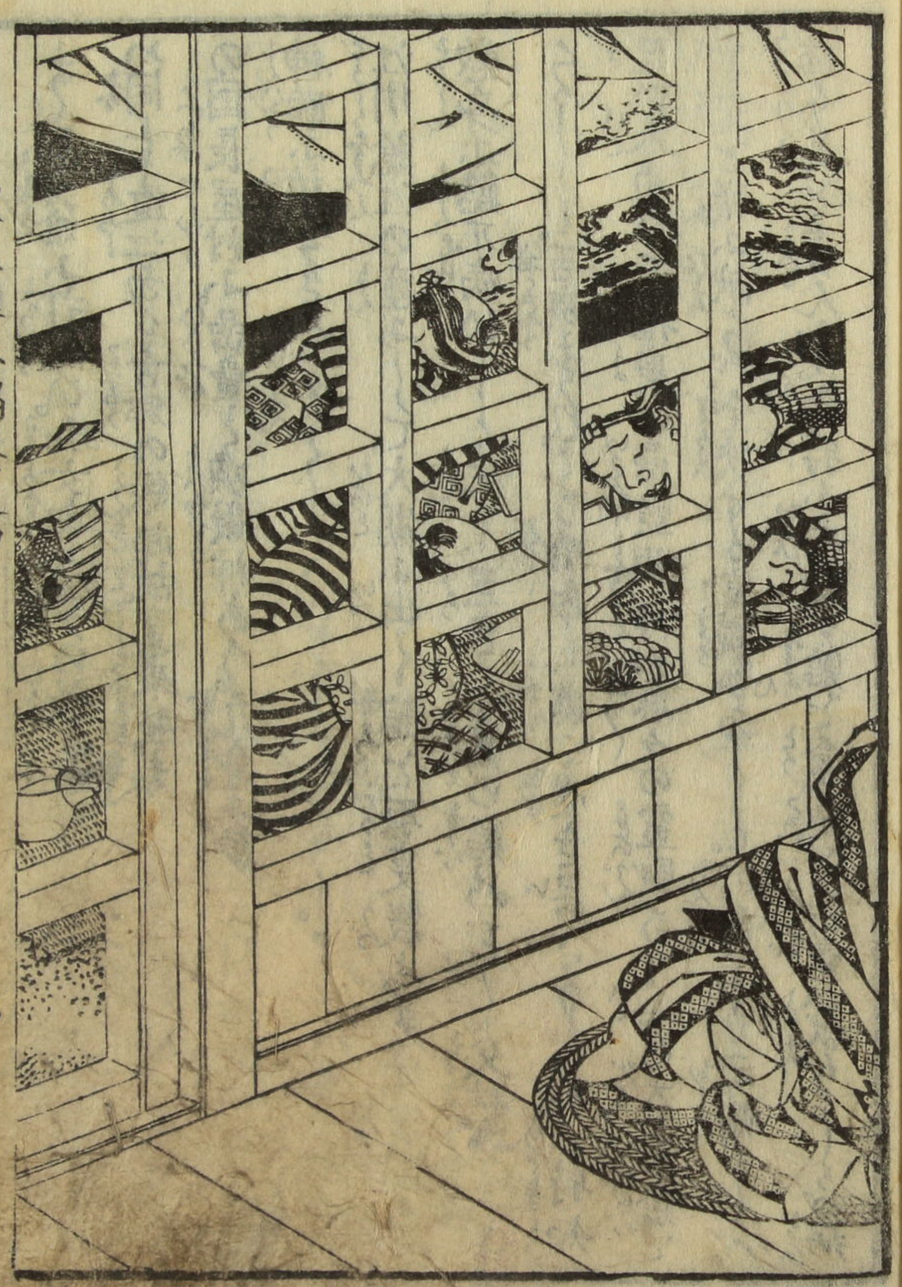
思ひよう。辞がたきの欲さるゆへ。恁ハ界の壁と穿ね聽バ御身もいとさらや。翌日千日の法場で。西ふ向ひてのすてやうべ。きてくれの。同じ〳〵冥土の路ぢ。同じ蓮へ伴同待らん。これの〳〵あるこで和女郎ふ。問ふ。こそ支の多うれば。あき見そあるせ獄卒ふ。胥ふ悄々地ふ貯へ持し。銭と与へひひ〳〵れば。丼くも酒ふ酔ひぐまで。恁語ふも知ぢやあるん。原來和女郎ふ鞫ふき。一件といふハ外なるべ。今日獄卒等が噂を聞ふ。今般蛟倉紫它二郎行竜といふ和郎播刄別所家の名玉と。奪拿ふ所持せ〳〵ふや。和女郎ハそぐ余類ふく。宇雉女と喚做よ〳〵。そこふ心得ぬ緯一ッあり。まぐ傳へ聞ふまづや。小可ハ播磨ふく。騙局ふ名と得し。鯰江の。濡九郎と喚

做ふのへ。吾主とたのゝ〳〵ふ。女なれども希代の勇婦ふそぐ名と巽と喚做ふう。去向七月廿七日三木殿へ（別所家）といふ偽勅使となりて入込。那大蚍の明玉ハ巽が手ふ属ふう。ちうるふまゝ蛟倉刀伜も。同ふ大蚍の明玉と。登時三木ふく得らまゝ〳〵ふんだふ。そぐふく心得ぬ。一顆ふう外ふあき明玉と。二名まで待ふうふハ。一顆ハ必ど假東西ふうん欤。されども名〳〵ふる玉ふあきば。離魂病といふ病のゝ。像と是里と那里ふ顕ちせ〳〵欤。心得がたきハ是のゝふある故よ〳〵と和女郎ふ問きうぬのよ〳〵。蛟倉主とやうぐ。明玉と所持せうまゝ〳〵緯ハ。偽ふくいあうぞうやと。詰きべ所雉ハ座〳〵居ふう。所と西ふ〳〵立上り。濡九郎ぐあうう近く立

ようつ。こゝ新ある絆と問ふ。小可ともも今宵中ふ限りゝる命あるべゝ何ぞ待らん。いろ、ふも吾淋が主とたのゝ。鮫倉紫它二郎と喚做人ぞ。まゞひもあき明玉と呼持せゝ。吾淋いつゞや行竜主ふ。那明玉の來歴と。悄々地ふ尋鞫ひゝふ。ゝまゝと一條の奇談ゝ。只當御身が主ありと。稟されゝ巽姫の。乳の下より出ゝゝゝゝや。嚮ふ播磨の比良田ふゝ烏羽玉の暗の夜ふ。戦ふ切りふ巽姫ぞ。乳の下丁と叮まゝゝゝゝき。突然ゝゝて這明玉光と放つゝ出ゝゝると。行竜主手早くも拾ふゝ其處と立退ゝゝと。吾ふ譚らまひく。恁れば大虵の名玉ふ二頭有支疑ひあゝ。それのゝあゝで行竜主と。巽主ゝふ前生

より。夫妻とあるべき因あゝゝや。那行竜も大虵の再來巽姫も大虵の再來。這故ふ那明玉と。愛のぞまるゝもそぞ學ふ入ゝも過去の因ある妙詮自證あゝと以て見るゝきゝ。畢ふ配遇の神ありて。這二方ハ玉搗の。夫婦とあゝゝ後世までも芳名高く鳴支あるべゝ。吾淋ゝとも這群ふ入べき一ッの因縁あり。原木刄ハ上野ある。白井の産ふゝ那川ふ一ッの淵あり。そぞ淵ふ住大鱣の法性菩提の音ふゝんじ。將人間と生れ來つ名さへも宇雛と喚做せゝ。尚前世の餘兆あるべゝ。そを知るよゝしのあれども背ふハ目のゝゝゝのあり。一時ト者是と見てゝ。あゞゝと說ゝゝ始く素性を洞査せゝと。譚まゝ鯰江閑毎ふ嘆息せすといふとあゝ


隅獄囚人談往事
ぬ丸ゞ



まゝ宇雑ふ打向ひ。和女郎ゞ今の話と聽てあり〳〵某乙〳〵
ハ同じく近江ある古郷の縁起故吏來歴まづ一通り聽話らし播磨
の国長屋村ふ品壷と喚做神あり。凡身ふ鯰たゞけの症ある者這
神廟ふ祈ときハ一名〳〵て治せざる者なし。ゞゞ父ある柿介ハ。
江州鯰江の産ふして。大湖ふ出て鯰と取吏數ゝまず。這酬ふ
惣身ふ鯰瓦病ひ〳〵と生じ黒きと真の鯰ゝ〳〵。父柿介大ふ
〳〵〳〵百療ゝれども驗なし。悲く嘆き居〳〵ふ。一時知
已の人ありて。播磨の品壺明神ハ。恁々の霊驗あり。一ツの大ある鯰を
拿。是と犧ふ献らゞ。全快する吏疑ひなしと。叮嚀ふも示揄〳〵ハ。
柿介是と喜んゞ。即時ふ大ある鯰と拿。是と品壷へ献りしゞ病

ふ頓ふ平愈せり。されども。那鯰路次ふて水ふ喝〳〵ん。三木の長屋
村ふ至り〳〵時ハ。早半死半生ふて。日あゝず亡ふ〳〵〳〵ん。
登魂霊の人間ふ果と得〳〵這五ふ顕ゝ〳〵ハ。這濡九郎ふ〳〵ハ。
其證ふハ這肩ふ鯰の鱗ふ似〳〵るものあり。そを隠さん為肩より
背ふ。龍の熟ふ〳〵。和女郎ふあれ某ふあれ。恁ゝ〳〵因あり果
ある身ゞ。〳〵〳〵空〳〵〳〵成吏ハ。身の為罪といひゞ〳〵。世と
あゞきふを吏ふ〳〵ゞやと。譚ゝび宇雑も共侶ふ述懐の
涙ふ湛ざり〳〵。登岩宇雑又いふやう。御身ハ什麼何等の罪
ふて。恁ハ獄舎ふ繋ゝ〳〵。死罪ふ遇ふやと。問ハ鯰法度ゝ〳〵。
されべとよ某乙ゞ。恁獄舎ふ繋ゝ〳〵ハ。種々の話あり。濵土の土

産ふ來歴と。心徐ふ聽ねう〜。不題往七月某の日。美濃川の一件ハ演ふ
盡ぬ味方の危急流ふ急ぐひ潮々と遠のひくれハ翼振と。焦ひ〜絆
と約〜。袂と右と左ふ別ふ。吾ハ西海洋へ好仕合もあ
らんうと。這里ふ暮〜那里ふあ〜。心くまあ〜あちこちとさま
よふぞ〜行空の末さぞめきく白浪の。打てうちぬ縁木の。林も
過う山も越名ふあ〜吉備（「吉の吉備の国と云ふ分ち備前備中備後といふ」）の国岡山の隍下
みぞ。足と入ふる。這地や四達のふ都會。人烟族々市井繁々。これ西
洋の舟湊へ。此時日ハ申晡ふ〜て。秋の日暮の近かまぢ。何時屋と
〜ふ歌客屋ふ歌休り。好合客も有ふ〜。騙ユふかけてられ〜ぞ
と。宵の内よう〜心ゞけ〜ふ。登日も稍暮過るころ。婦主の客來

もう。二十二三の小厮一名ふ。両荷と持せ。ゞ〜那何時屋へ入來う。
主ふよ〜と告て。登夜の歌休と。乙求め。奥亭ふ通りうう。濡九郎ハ
ち〜〜と。那女の容貌と見るふ。年ハいまゞ三七と一ッ欠二ッ欠
過ぢ〜〜ん。姿形美麗の好東西あれ。まゝそゞ荷東西重ゝあり
東西最麦ゝる体ありうれ。今宵の騙ユハ這衒妻奴。年ハ少〜すぎ
うれ〜。挿巻へ持勾ゞ六十金れ。弄賣ふ〜も價あり。そゝのく
あ〜ゞ那ゞ衣裳。兵ふ荷東西のおゝ〜ゝ。楚〜〜〜直高品ゝ
這奴と騙ゞ〜〜外ふ有べきゆゝと胸ふ問胸ふ答て思案〜。
まゝ〜ゞ〜と思ふ。今宵ハ伏長と一夜とあ〜。那ふ出船
と待うけ〜。翌日ようう騙窺て好場所ふく。那小厮奴と結果并

く荷東西と衒妻と。手拿にせんと心の較計。鄙言にいふ長範が
當吞と鋏ゆふべし。然ね前から當算用。首言頭髭品具が十四五
両衒妻が六七十両。それが衣裳にも十両や壹貫目の直高價なり。
是かいもそりや百両なり。加旃那荷東西は廣大無量の大光明弥陀
の鞋草のあらん支。それ今爰にて算用すべし。とまれかくまれ
黄金の山と。思ひなされば這家の主と悄々地に招て酒肴を早々
と調させ。那女が次の間にて。自さしつおさへつ二三合もや傾し。ころ
よりも濡九郎は奥亭に立向ひ。中よそこな御女中よ。吾只一個先程
より。酒仙界に入られども男一名ではどうも酒宴に興らすし。
最も無礼なる支なれど辞ずとさや盃の。合對に暫し御女中や

御青人も供侶に。吾這酒国に入すへと。んすくもあらば那女は再三再
四固辞をれども。濡九郎さらに聽入ず。七ふく暫も止ざれば。女も
辞もる支なくそず。ゆうりく席に付なりり。原來是よりは濡九郎
と。那女と那小厮と。ののごとく座をしめて。さしつおさへつ一時ば
かりも吞なりける。登あそびには濡九郎。主を召て追々に新成
肴を出させ。八畳の間は人三名と。極盃肴鉢で満充になり。足踏
入る所さへなきがごとくになりにけり。登時小厮は何やらん必し
備辞のありといふまく。濡九郎に辞し。那女によしと告て小可が
帰らんまでは。亭子中にもありぬべし。霎時憑禀くと出て
他所へ趣きけり。扨しも跡は濡九郎と。那女二名のみ。那女は酔眼

に情とふくんで言さまのたぐひ。ふいくがそうくれば濡九郎も謀反と起し。春心天頭より出來り早すうよつく云云と。挑つ説つ色仙界二名ハ住境に入ふうとて亭子中すゞる頃那小厮もうく来つ。見まゝば濡九郎大に醉て。泥のごとくにあるくれば女ハやゞ〳〵主とよび。首言ちや酒肴と引〳〵つ。自扶て濡九郎と閨の中へ舁入つ上ようう薄團と多く被せ。那女と那小厮ハそゞまゝ〳〵奥亭に退出ろう。誰欤知ん那女ハ女騙局の隨長ふく。實名へ垂氷の阿曼と喚做者ふく。或ハ組糸と喚做せり（此女ハさきに福屋禅二郎を欺き雌竜丸の名刀を奪ふ者あり）又そゞ小厮と見せるハ實ハ那ゞ男妾ふて。丁百九郎と喚做者ふ。不題も垂氷の阿曼ハ。與夜丑ふつの頃おひに濡九郎とそゞ合客の東西數と知まゝ寒拿。又両荷に入させつ仕合好といべえふいそでも知るゝ男女の騙局欲と情の両人つまゝ。手と引あつ〳〵出行ろう。そゞ中に濡九郎ハ。十分酒に醉ろる夏故十両計貯〳〵黄金ハいふにゆよゞづ。刀帯半袍まで遺なく拿まくのろう〳〵東西ハ僅に裕衣と犢鼻褌のみ。その夜もわのがのと明ろれば既に女賊逃去く。三時計も過ろまゝば。跡さ舊さへさらに見へねば家ふ〳〵騒動大ろう〳〵ろう。是ハ可〳〵ろう。

まゝ仕ル
時何時屋の主書付ヶ〻の酒の算用書附〻を出さ来り濡
九郎ゟ前ゟおき是と御覧といふゝゝゝゝゝふ。濡九郎ハ渋々と那
書附と拿あげ見ゝふ。酒四升その外肴二十七品代十一貫二百文
と書〻ゝゝれべ。濡九郎声ゝゝ立主ゟ向ひゆよ亭主和主ハタべ
の酒肴と某乙一名ゟく呑〻と思ふや。見ゝゝく通り三人寄合。
三ッゟごゝく呑〻る酒へ云ひでも知〻ゝ支。三ッ割ゟ〻て書附出
〻ねゝ。いべハ主ハ呵々と笑ひ。こゟ客人ハ怪ゟ人ゟ。タべの酒ハ

三人ゟ。五人八人呑ゟふゝも。御身一人〻て某と。悄々地ゟ招きて信々
の。御客ゟれべ酒まれ肴まれ。氣と張て。出〻ねゝとのゝまひ
〻ふハあ〻ずや。然ゝふその客ハ盗人ゟ〻。蔭ゝも知まず逃去て。言
人者の無と思ひ。信のゝまふハ無理ゟ〻ずやと。理屈ゟ責られ濡
九郎。今更答る言ゟく〻顔と赤ゝゝ申ゆゝ。信いべ是非ゟあひ。
世ふ阿房ら〻ひ東西ゟまゝど。某乙償得ゝすべ〻。然ゝども見ら
ゝ通ゝ。タべの災難盗ふ拿まゝく〻。金銀のキの字も這首ふ持
合さゝべ。今同ハどふも償ゝ〻し。雲時待てゟゝ〻ずやとゝゝべ
主ハ首と掉。何国の人ゆゝ知ぬ人ふ。銭と借べき謂ハゟ〻。是非ふ今
同の算用ハ仕まゝ〻たべと云ゝふど。濡九郎大ふゝゝ。こゟ主無

理あることといふ者うぞ。吾タベ賊ふ遇金銀衣服腰の東西まで。奪れ〳〵顕然と。汝も知らる夏あらすや。開方ふも誤譜あるふあらぬぞ。容体不正の旅人と見べ。あせふ一ッふ止ろうや。這と以て見る時ハ。此家の主も那女賊と。支墨と。罵うられべ。晝介此家家の主大ふ憤う。こハ聽弄ぐこき雑言うぞ。吾と騙扇の支墨あどいふ。汝こて胡論べよ〳〵と御上へ由〳〵上。吾賊欤賊であと欤と。正〳〵其後酒代公ふく受取べ〳〵。其處ふ待て居よ。やよ〳〵家内の掘共。這奴と拿ふぐす夏あうぞと。云おき。表のうへへ駈出ると。濡九郎たまうぞ。跡辺より飛うと。晝介とひつ握ぐ。大地ふぐふど投付られば。憐むべ〳〵晝介ハ天窓ハ水切の石ふあうぞう。血洋さつと逆りそぐ

息ハ絶ふうう。家内の小厮們是と見て。こハ人殺〳〵のぐすあと。手ぐり捍棒引提て。四方より打てかくると。濡九郎夏ともせず。一名ぐ打込捍棒引〳〵う。尚ふ者と二名まぐく。忽地打すへうられば開它の者侶大ふ恐れ。近よる者ハ一個もあ〳〵。濡九郎ハ捍棒引さげ。表の方へ逃出うる。開あうさま。元よう帯と拿生〳〵夏故横鼻褌の上ふ袷袍ともあう。右の手ふ棒と引さげ。跣足ふて東の方へ逃走るあうさまハ。此頃より発病せ〳〵狂人のぐく。可笑云べうもあうぐうる

第十八回　法場と開〳〵て両龍両賊ともふ

當国の領主ある。浮田和泉守直家主の。這地ふ付置生てる眼代

某那あり。今濡九郎が人と殺し。市中と鬧ぐすと聞よりも即時に駸兵と引つれ。何時屋の方へ馳行所おちらず濡九郎を出合うに鯰江かくと見るよりも。引ゑて退く所を。縛捕使の大將是を見て駸兵と下知して八方より。濡九郎とあつらう囲。御諚そこ〳〵喚かけ〳〵。三七二十一に競蒐まつる。いをりひ免べうもあらざまば。濡九郎は吐嗟とだくりに殺脱んと欲すれども。身に鐵を帯ざまば那捍棒と打ふりて。當に儘して搏仆と。多勢なまば物ともせず。前後左右に折累り。矢場に組住操伏て。押て索とうけふうう。大將某那は既に。濡九郎を召捕られば。駸兵に牽〳〵衙所に還りて。即便彼を出所來歴做〳〵恐支と。八問に濡九郎は詐陳して。罪を免んと欲されども。眼代何某毫も聴義せず。責ふけ責結問られば。濡九郎首状して。那女賊の來歴は我曾て知さとひ。小可は元江刃の産にて。今賊と世渡りとせうこれうに外に悪支は做さず。次と免省のはしとやみられど那眼代汝相貌つそやより。繪圖して鞫る賊に似くう。そぞ本名とあらせよかく〳〵。ますく〳〵きびしく責ふるぞ。濡九郎かくさよよく〳〵。小可は即播刃の。赤松別所家へ込入し。巽姫が手下ある。鯰江濡九郎と喚做ものと遺あく首状〳〵ふうられば眼代何某うに。つきて左ゑそあらんとて。そぞ仍其夜は獄舎に繋し。その翌日播刃の三木殿へ引ゑさふ。さまども巽姫に鯰江們が支は。室町將軍の

御沙汰ふおよび。私あ〳〵ぬ罪人あり〳〵て。三木殿ゆゑ誅罰の沙汰ゆゑ
〳〵そぶま〳〵浪花津へ引渡し。不原い〳〵〳〵びしとあり。明玉の去向と鞫
問ふとゝ〳〵ども。さ〳〵ふ只その玉ハ巽姫の呼持せ〳〵ものあらん。
這義ハ小可存ぜどと稟ふとゝ〳〵て。かゝるとてハ問ふ事のべず。そゞ儘
獄舍ふ繫〳〵つ。日と定め〳〵宇雜と共ふ誅罰せんとゝぞ定らる扨
是まのでハ濡九郎が。獄舍ふ入〳〵來歷の長譚とあせ〳〵ものゝ省官
よろ〳〵〳〵察まべし。押説宇雜ハ首よう。濡九郎が長譚と閉度毎
ふ嘆息〳〵つあと云云と夜〳〵異ふ。そんとせ〳〵とゝ獄衛の首〳〵
眠の目とさま〳〵。両手とのゞ〳〵咽欠〳〵つ。何欤呐喃々々口の中ゆ。
つゞやきあゞ〳〵起ゝれゞ見とゞあられとゝあ〳〵うあんと。鯰江

の濡九郎ハ。あせ〳〵天窓とあそ〳〵〳〵。泥亀のとゝ〳〵〳〵ゞ〳〵。元
の穴へぞ引ゝゝ。さ〳〵ぬ体ふ〳〵坐〳〵居〳〵。去程ふ其翌日己
れゝゝあひ。隱岐介ハ浮木亀太夫們と。聽ふつ〳〵〳〵。鯰江宇雜と
誅戮の。隧配と示ゝゝ。鯰江ゞ支黨巽女宇雜ゞ支黨紫它二郎。
這二名ハ幻術あゝべき物。ようて浮木亀太夫と撿監〳〵ふ。夥兵
七十余名と將〳〵。おさ〳〵非常と警むべ〳〵。某乙もま〳〵此者
ぞゝひ〳〵て。その近辺とゝも巡らん。用心かゝ〳〵のゞ〳〵あ〳〵べ。行竜
巽幻術ありとも。是とゝゝふふよう〳〵〳〵ん尤濡九郎と宇雜
奴と左右向ひ合〳〵ふ居さ〳〵つ。一時ふ首と打べ〳〵。〳〵べ皆其
あゝゝと得て。おの〳〵宿所へかゝ〳〵ゝ。おさ〳〵准備とゝゝゝる。

かくてちやその日を少〻斜なる時屠所の羊牡あるれげふ急ぐ如
ものを時のうず。ハヅ〻いくべ獄より。牽出さるゝ鯰江宇蘿拉怨
ゆゝぬ縛の索端短ふ。とる手緊く追立る。七八個の獄卒と。七十余名の
影兵們ふ。稲麻のごゝ〻用て。千日さゝて趣けば。是を見んとて集る
老少の錐と立べき処もなき既ふゝて浮木亀太夫へ。千日ふ来くれば。
豫て其場ゝ擇〻あり。左右ふ分ちて。鯰江宇蘿と。土壇の上ふ牽
居さすれば。七十余名の影兵們へ。手ふゝ桿棒突合ゝて。見物人
と静〻ゝ。當時浮木亀太夫へ。床机ふ尻と打かくまべ。獄卒們ゝ
両名が。拉捺と釋去て。八重索被て守てあり。亀太夫是と佶と見て。
ゆゝれ両賊汝們が。罪科五逆ふ當ちゝ。ようて公廳の下ふ詳

で羨ちと。つゆ〻〻呼うけ〻。懐ようり一通の刑書を取出て。詳
聞ゝ。二名の劊卒。左右ふうゝれ。夏あと寒き。大力朴ちゝゝと殺
て後ふ向ひ。左右科〻内〻て。両名が首を只一打と。呼とかけゝる声
ようり先ふ東西遥たゝる群集の中ようり。ハ〻と打ゝる手裡剣ふ。左右
ふ立〻〻二人の劊卒。咽下丁ど打込ま。痛手あれば要時も得〻ぞ。
両人へ苦と叫びつ。刀と弃てぞ倒ちゝる。亀太夫いこんともいろゝ。
驚あゝ〻大音あげ〻。呼ようゝる。賊ふ与ちる癖者あり。疾蒐出〻
て生拘ちと。声ようり絞りて下知ちれば。兼ちるふく。影兵ゝも東西ふ立
分ち。走り進んとする程ふ。登下東西一時ふ顕ま出〻。男女二名。那是
科一鎗ひつさげ。清朗なる声ちるやうに。作麼俺們と誰〻ゝもゝ。

播州ふかくまろうど。蛟倉紫宅二郎行龍品曽古太平二助盛ゞ娘巽子下の二人ともくりんくわ。悠法場と開くと。呼ばる声ふ衆人ハ瞳と定めて是を見るに。行竜其日の扮出ふハ。身ふハ熊の皮ゝ大袖袍を着し亀甲入うる小手臑衣ふ金作りの心當と。大袖袍の際より顕し。月額のあと少しゝのびて。容貌美麗の壯佼く又西の手より顕まてるハ。年齢二八の乙女ふく。細腰長艶その身ふうのび。笑ハ呉城を傾くべゝ。歩ハ唐宮と血ふまぐゝ。沈魚の容貌。落雁の形姿。美々ゝゝて媚もゝゝあゝ。艶々ゝゝて威武うゝ。身ふハ紫の袿長綺ふ袴ふ杜若の紋ありて。緋鹿子の玉裏襠を被下ふハ黄金作りの胴甲をひゝゝかくめ。鎧とひわつゝ顕を出しゝハ。東西一對の好男好女。行竜と王とあゞめ。巽女と花と愛と。嬲儒希ある者侶く亀太夫驚き騒で彼ゝう。篭て撃仆せと。胴色烈ゝゝ呼られハ。夥兵ハあまふ奬わゝく手ふゝ捧どうち振て。逆進と行竜巽ハ。もゝゝゝと右ふ受左りふ拄て毫も擬議せど。瞬間ふ五六名尨尾中脱矣伏う。亀太夫逆ふ是と見て。敵ハりづうふ両名あまとも。獅勇當りがとられハ。禦もあへど鯰江宇雄と。棄ひ去ゐく夏ゆやあらん。這奴とちゃく結果てうゝゝうやきゝするとよけれと。肚裡ふ尋思しゝ。遺る刀と取揚く。遽く鯰江のかとうへ近づくんとする折うゝ。忽地後方ふ声ありて。亀太夫且く等巽女あゝにあり首をとゝせと呼留うる。色ふ愕く亀太夫ハ。阿と魔て飛あゞる。運歩凹凸有ふ見へ

かり太夫
うあぎ
三ぐり

枚臺益猖獗

くれば。巽ハ鑓と閃く。透間もあく突立すれば。亀太夫ハ遽くく刀と以て受拂ひつ且く防き戦ふ。亀太夫が若黨と五六名の獄卒。おの〳〵應物とうちふりて。共侶ふ援け來つ。撃倒さんと競ひかゝるを。巽女ハものともせず。精神まし〳〵加りて。薙立駈立もくくゝ。そのひまふ行竜ハ拄る敵と思ひの隨ふ。八方へうちちらく〳〵つ。だちふ走りよりて。宇薙が縛の索と釈棄まば。宇薙ハやゝ身を起く。四下ふ落ちる一刀とひろひ拿。獄舎の労ゐ屈せく色あく。行竜等と共侶ふいさくすんで向ひ來る駅兵の兵ふあくゝ。去ねどふ巽女ハ拄る若黨獄卒を。一人も漏さず刺伏て。亀太夫ふもあちらと。數ケ所の深疵を負く。ふくれば

迯んとすつ走り得ず。矢庭ふ倒れく死てぞう。物員あく兵奴隷們ハ。ちと旦く逃去く。手ふうつ敵もあくく。巽女も鑓と棄。走寄て。濡九郎が縛と釈去れば。鯰江宇薙大ふよろこび。互ふ礼ちそのべふくう。行竜巽ハ今日ちくふも。鯰江宇薙とすくふふ及んで。首く顔と見合く。互ふ心安くず。行竜ハ中ゆくとう。和女郎ハ往七月。三木の比良田で首て會く。偽勅使の女あくずやと。問ば巽も訝りふぐく。和主ハ登時横笛と。吹て吾洋ふ侍倍せく。姓名未詳の壮佚ならずや。句計ぞ並べく双抗佳會。思ひハ今ふ十す鏡。蔭見る吉又も奈末餘味の句。思ひハ同じく吾洋が恋人。心の暗ハ烏羽玉の玉争ひく暗夜の駈退。御身ふ拿ゆく名玉も。再吾手ふ入くるハ。句因あり果

ある絶奇縁登時某乙ゞ切付し。刀のさへ和女郎ゞ乳の下ゝう頭出し。玉ハ即吾手ふあり。句然らバ一對双玉の。計ゞ假の契とも。ゆ〜も。深きいもせの縁あるべし。と双方心とゝめ。さて赫む顔の花紅葉。照日蔭ゑ〜ふゝろう。此時四個ハ商量〜つ。今わゞの騒動ふ見物人ハ逃去て。四方ふ遁る人もあり。今ハ〜も此地ふ要なし。ちや〜淀川と打ゝろうて。鄰郡まゞ〜退〜べし。誘ゑと急ゞせつ足ゞやふ走り去ゝ支七八丁。まゞ十畳ふハ過ざりゝう。浩る處ふ眼代堅隅隠岐人。新隊の雑兵二百余人。塵埃と踴揚て追うけ來つ。廻者と討止ゝと頻ふ下知と傳へ〜ゝべ。貪烏銃と携ゝう既ゝて騒兵們ハ早四個ふ近づきて。前來程ゝ〜ゝあるまの〜ふ。筒先ゝそろ〜連ゞ〜。火蓋と切んとゝる折ゝう。行竜巽ゝ〜と見ゝより。前後ふ分ゞ〜手と結び。口ふ呪文と号ゝべ。忽然ゝ〜て猛風起り。黒雲地ゝう卷上り。風空光と舞て。沙石半天ふ踊。俄然ゝて酔そ〜ゞ。ゞ立の雨繋と乱〜て。忽地火縄と消ゝうゝう。騒兵の大夢思ひゞけあゝ。大風暴雨ふ度と失ひ。且〜捫扨ゝるゞどふ。夷々々と鳴ゝ〜る。疾雷電光〜て。雨ふれ烈〜かゝうれハ。騒兵ゝ〜騒ぎ乱ゝ〜。まづゝや雨と避んゝて。貪樹の下ふ立寄て。大將堅隅久厚ゝ〜ゝ。其它の騒兵們一人も。まゞ〜討出べきゝ〜ゝ。言ゝ〜ゝもつゝぞゝ〜ゝ居〜ゝう。行竜巽ハ是と見て。呵々と笑ゝ〜又口ふ呪文と。要時号ふゝ。鯰江宇雄も供侶ふ姿ハ消て去ふ

なり。稍暫くして雷も止、風治り雲散て、再日光西山に皎々として
照しけれど、四個の賊は逃去て、四下に影だも見へざれば、詮術なさに隠
岐介は下知して衆人の死骸を皆それぞれにとりおさめさせて
引取たり。案下某始題是遠にて、行竜巽。鯰江宇雉等は幻術を
以てなすくど、賊兵の中を切抜来りつ、原來淀川の南岸なる。人なし
所に打よりて再説話をそじめたり。登時しも巽女は行竜に向ひ。御
身なれ吾隣なれ。等しく明玉を所持せしは。宿世の縁有事なる
べし。吾隣は即播磨なる。天神山の大蛇の精が。此世に生れ出たるなれ
ば。遍く同志の無を語らひ。屠り取まし天神山を。再び味方の居所
となし。恨に思ふ三木城を。討潰んと思ふて既にもや日久し。然るに

御身も明玉を所持しまふのみならず。幻術まで吾隣に等しくぞ。そ
が年齢さへ同じきれば。そしや雄龍の再來ならん。狭志も同じきや。と
語りまへと問うくまべ。行竜もおかし笑て。即さきに天神山の狩くら
のおり。大蛇の亡霊に出合し事。其身も蚖蝎の精なる事。且天神山
に居を示て。旗を北播にあびうきんと思ふ所存。猶弁己の事まで遺も
なく語りければ。巽姫は大によろこびあへるおひへく。那明玉を取合え。
鯰江宇雉双方の媒となり。夫婦の縁を結びたり。鳴呼此漢子あり
て。此好女子あり。玉と花と一對して。加るに同氣相求。雄龍雌竜の配
合なれば。臭業まきふならんとす。嘆べきや憎べきや。登時行竜巽女は。
鯰江濡九郎と宇雉女を。媒として夫婦となす。二人大によろこんで首く

縁とむすびゐる。是ゐうして行竜と。雄龍頭領と。嗚巽姫と雌竜頭領と。称へまきふ調て妖賊の魁主とありぬ。登時行竜ヤゐるハ某乙悄々地ふ考ゐるふ。別邪家ハ忠臣多く。中国ふ又益あれ。一大諸族ふ〜て地廣く。城の要害究く堅し。今天神山の要害ふ。三木殿の指臣ある。蒲上大学居城と築ゐう。彼ハ奸智の者ふ〜て。上ふ主家と尊やど。意ふハ反心あり。其虚ふのり〜味方ゐう。不意ふ起く責打あび。大学智術ありとゐ〜ゐ。破まんと必然ハ某蒲上ゞ居城を畧し。兵をヤ〜あひ勢ひふのりて。播州一ゐんゐう打まゐ〜ゞ。覇を中国ふけゐるべし。今天下の諸侯割居〜て。国々ヤすれ日〜ゐハ鮮し。唐山ふハ倫兒の天子ゐ

ありし〜もありとゐ〜。それハ五代の時。梁の全忠是ゐ這們ハ即倫兒の天子酒家ゐ〜運ふゐるひ時ふ乗らん。覇業必ど成ぬべし。まゞそれまゞハ四個共。分ま〜諸国を巡歴し。明年八月ふ至りあべ。播州清水ふ〜會合すべし。ゃ。ゐゞ皆々是ふ同じ登夜ハ新の枕と並べ。それゐ四方ふ分まゐう去かゞふ行竜ハ名残ゃ〜さび最厭ふ多う故ふ那巽と姿をゐて再びまゐ。浪華津ふ立ゐう。互ふ互ふ力を尽し同志の族を招聚ん或ハ兵を起さと謀と談じ。楽〜ひよ〜深ゐうゐるゞ。

一日巽ヤゐるハ。吾淋ハ是ゐう東ふ趣き。那地ふおひゞ一味を招かん再會ハまゞ明年の秋ゞちゞわふあゐぬべし。無夏ふ

うくらせすくやと。云置て東路の。旅の空さへ定なき。只一個ふて出行る

近世新話雲晴間雙玉傳二編卷之四終

乾坤堂